

< 確率変数の平均と分散 2 >

例 1 表 1 のような確率分布をした確率変数 X の期待値は

$$E[X] = 1 \times \frac{1}{2} + 2 \times \frac{1}{3} + 3 \times \frac{1}{6} = \frac{5}{3}$$

である。 X に対し

$$Y = 6X + 4$$

とおくと Y も確率変数でありその期待値は表 2 より

$$E[Y] = 10 \times \frac{1}{2} + 16 \times \frac{1}{3} + 22 \times \frac{1}{6} = 14$$

となる。一方 $6E[X] + 4 = 6 \times \frac{5}{3} + 4 = 14$ より

$$E[Y] = E[6X + 4] = 6E[X] + 4$$

が成り立つ。

X	1	2	3	計
確率 p	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{3}$	$\frac{1}{6}$	1

 (表 1)

X	1	2	3	計
$Y = 6X + 4$	10	16	22	
確率 p	$\frac{1}{2}$	$\frac{1}{3}$	$\frac{1}{6}$	1

 (表 2)

一般に確率変数 X と定数 a, b に対し

$$E[aX + b] = aE[X] + b \quad (a \text{ と } b \text{ は定数})$$

が成り立つ。

確率分布が表 3 である確率変数 X の平均

を m , 分散を v とする。すなわち

$$m = E[X] = x_1 p_1 + x_2 p_2 + \cdots + x_n p_n$$

$v = (x_1 - m)^2 p_1 + (x_2 - m)^2 p_2 + \cdots + (x_n - m)^2 p_n$

である。 X に対し

$$(X - m)^2$$

も確率変数であり、その確率分布は表 4 になる。これから $(X - m)^2$ の期待値が v

$$E[(X - m)^2] = (x_1 - m)^2 p_1 + (x_2 - m)^2 p_2 + \cdots + (x_n - m)^2 p_n = v \quad (「Xの分散」 = 「(X - m)^2の平均」)$$

であることがわかる。 X の分散を記号 $V(X)$ で書くと

$$V(X) = E[(X - m)^2] = E[(X - E(X))^2] \quad (X \text{ の分散})$$

となる。ここで $m = E[X]$ である。

例 2 平均 m 分散 v の確率変数 X に対し $Y = 6X + 4$ とおくと

$E[Y] = E[6X + 4] = 6E[X] + 4 = 6m + 4$ より Y の平均は $6m + 4$ である。 Y の分散は

$$V(Y) = E[(Y - E[Y])^2] = E[(6X + 4 - (6m + 4))^2] = E[6^2(X - m)^2] = 6^2 E[(X - m)^2] = 36v$$

問 平均 m , 分散 v の確率変数 X と定数 a, b に対し, $Y = aX + b$ とおくと

$E[Y]$ と $V(Y)$ を求めよ。